



Promenades japonaises
 (『日本散策』—本学図書館所蔵—)

「最初の印象」を重視した旅行記

ギメは最初の巻の中で、ホテルで別の外国人滞在客と交わした日本についての会話を紹介しています。これは、ギメが本を著すことを前提としたもので、滞在客の「観光客の方々は度し難い。自分は15年もの間、日本に滞在しているが、この不可解な国日本について、一行も発表しないように心掛けている」という趣旨の言葉に対して、ギメは「一つの国について語るのに、二つの方法があるものです。国民、生産物、商業、法律等々について正確な情報を提供する統計的な方法と、たとえそれが数分のものであっても、受けた印象を与えることだけを試みる芸術的な方法とがあります。そしてこの最初の印象が、最も生き生きとした印象であると、信じて下さい」⁽¹⁾と述べ、外国人滞在客が語った西洋文化と比較して「不可解な国日本」とする見方を間接的に批判しています。

ここでギメが語る社会学的方法や比較文化学的な研究方法を駆使するよりも、芸術的方法を優先するという考え方は、この対話の後半に彼が述べる「世界を周る旅行の魅力の本質をなしているのです」⁽²⁾と述べているところで理解できます。ギメは自分が短期的な旅行者であるがゆえに、専門的な図書を記す計画はなく、印象深い旅行記を著すことを考えていたのです。

昔話や伝説も紹介

このような考えに基づいたギメは、二冊の『日本散策』の中で、案内された先々で見た日本の特徴的な場所やこの旅先で会った人物などの紹介をし、レガメーの絵で臨場感を高めています。その中には名所や旧跡に纏わる昔話や伝説を随所に記載して旅行記としての幅を広げています。たとえば、鎌倉では「頼朝の恋」を平清盛による頼朝の伊豆配流の処置から、妻となる北条政子との出会い、さらには平家に対する頼朝の旗

揚げなどを、この歴史に出てくる人物の名前に間違いを生じながら、たどたどしい知識で書き綴っています。これは、恐らく地元住民から通訳を介して聞き出した話だと思われ、手法そのものは民俗学的なものと言えますが、ギメはこの本を記すにあたって、日本の民間伝承を精究したとは思われず、不確実性を含みながらも彼が言う「最初の印象が、最も生き生きとした印象」として表現したものと考えられます。

ジャポニズムの高揚に貢献

この『日本散策』はフランスで大変な人気を博しました。ギメはこの成功に続き、伊勢や京都、大阪、神戸などの巻の刊行を考えていたようですが、結局それは実現しませんでした。また、ギメは「廃仏毀釈」運動の風潮を払拭しえない日本において、人々の心の中で色あせていた仏教芸術品を収集してフランスへ持ち帰っていました。そして、その多くを1878(明治11)年のパリ万博に出展し、ジャポニズムの高揚に繋げました。

ギメはその一年後の1879(明治12)年に東洋学の研究組織を発足させると共に、リヨンにギメ博物館を作り、東洋での収集品を公開しています。その後、この博物館の収蔵品は1885(明治18)年に国へ移管され、パリに現在も有名な国立ギメ博物館が誕生しました。また、レガメーはギメの文化活動を手助けしながら日本研究書を刊行し続け、1899(明治32)年に再び来日し、その報告として名著*Japon* (『日本』)を著すこととなります。

さらに、1900(明治33)年にはパリ日仏協会が設立され、ギメが副会長、レガメーが事務局長に就任しています。このように二人は、当時の数少ない知日派で、日本人の心温まる親日家でもあり、両国の文化交流の礎を築いた人たちとして、今後も永く語り継がれて行くのではないのでしょうか。

註

- (1) エミール・ギメ著 青木啓輔訳『1876 ボンジュール かながわ』32-33頁 有隣堂(有隣新書6)昭和52年。
- (2) 前掲書 33頁。

参考文献

- 青木啓輔訳 『ギメ東京日光散策・レガメー日本素描紀行』(新興国叢書 第Ⅱ輯 8) 雄松堂出版 昭和58年。
- 尾本圭子、フランシス・マクワン著 尾本圭子訳『日本の開国』(知の再発見双書 54) 創元社 1996年。

おく まさよし(司書・図書館事務長兼管理運営課長)